

花 き

実 況

1 キク

奥越での8月咲きギクは暮れ植えの8月咲が10日以上早かったが、8月まで開花しなかった春植えギクは7月下旬より気温が高かったため、高温抑制により開花が平年よりやや早い程度となった(図1)。ただし、それまでの開花前進化で、8月の盆時期には出荷量が大幅に少なかった。8月11～13日で80～200箱であった。キク単価は60～80円で推移した。病虫害では7月下旬からアザミウマ類、オオタバコガ、ハダニ類、黒さび病の発生が増加した。8月中下旬から白さび病が少発生であった。和泉の盆ギクは白さび病が多発した。

大野市の春植え9月咲きギクの草丈は(8月15日調査)、「シューホワイト」が85cm、55枚、8月下旬開花見込、「くるみ」が84cm、55枚、9月中旬開花見込、上庄の「秀玉」が82cm、45枚、「あすか」86cm、34枚、「宝」93cm、38枚で、8月下旬開花見込、「山手姫」92cm、52枚で9月上旬開花見込である。一部にオオタバコガの食害がみられ、ハダニ類が全域で微発生である。

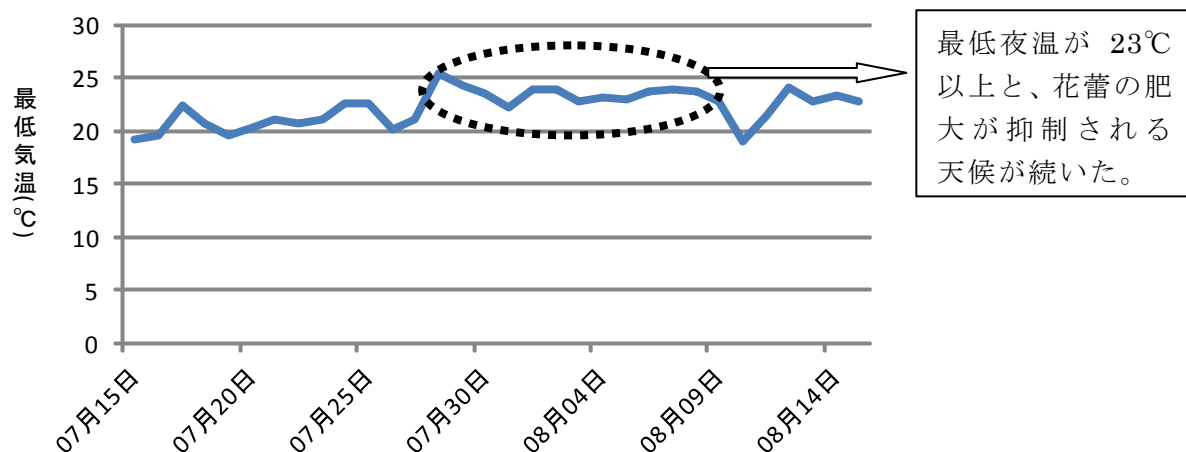


図1 大野市の最低気温の推移

坂井では7月～8月の高温乾燥により生育が悪く、草丈がやや低い傾向が見られ、開花は例年より5～7日早く、白さび病が中発生で、一部にハダニ類とアザミウマの食害が見られた。特に8月下旬～9月上旬は花弁先に傷みが見られる。寒ギクは「寒月王」「アムロ」「雪まつり」は草丈22～26cmで生育は順調である。

福井の春植え8月咲きギクの草丈は、8月17日調査で(昨年は6日調査)、二日市の「花絵」(出荷ピーク7月27、28日)、「小鈴」(出荷ピーク8月7、8日)の収穫が終わった。9月咲の「リボン」は草丈60cm、蕾径6mmと平年並みで、病虫害ではグンバイムシが少発生である。

東郷地区の4月下旬に定植された8月咲ギクはエスレルが2～3回処理され、「小鈴」「小雨」「恋心」はほぼ収穫が終了し、収穫ピーク時期は8月5日前後であった。

越前町宮崎地区の4月7～14日に定植された植調剤無処理の8月咲ギクは7月20日前後に開花した。9月咲ギクの「ゆかり」草丈72cm、蕾径9mm、「かれん」86cm、4mm、「りぼん」86cm、5mmであった。病虫害はカスミカメが多発し、黒斑・褐斑病が少～中発生。越前市の盆咲ギクはエスレルを2回処理したにも関わらず7月下旬に開花し、8月16日現在、ほぼ出荷が終了し

た。

二州の8月咲き小ギク「水鳥」、「翁丸」、「くれない」等は、8月15日まででほぼ収穫終了した。開花は全体的に5日ほど早く、草丈は平年並みであった。病害虫は全体的にアザミウマ類少発生。一部の輪ギクでオオタバコガの被害がみられる。8月15日調査(昨年8月20日調査)の9月咲き小ギクの草丈は、「映紅」が草丈75.6cm(昨年69.8cm)、蕾径5.9cm(7.4mm)、「わかさ」が草丈94.4cm(昨年87.4cm)、蕾径3.9mm(昨年2.0mm)、「おりがみ」が草丈84.6cm(87.4cm)、蕾径5.3mm(5.0mm)であった。「金風」「しずか」「ミミレ」が幕切れ～開花はじめであった。病害虫は、アザミウマ類少発、一部品種にキクモンサビダニによる紋々病がみられた。10月咲き小ギクの生育は、「お吉」が草丈36.2(40.6cm)、「ふるさと」42.0cm(47.6cm)、「はくろ」35.6cm(34.4cm)で、一部に鱗翅目の頂部食害がみられ、オオタバコガと考えられた。

若狭の4月13日より定植された8月咲きキク「くれない」「翁丸」「しらかば」は、8月中旬で収穫を終了した。病害虫は全体的にアザミウマ類が少発、一部品種で白さび病が少発生し、中輪黄ギクにはアザミウマの被害が多かった。

9月咲き小ギクは5月20日より定植された。8月15日調査(昨年度8月20日調査)で、「楽園」の草丈が110.2cm(98.6cm)、蕾径4.2mm(3.8mm)、「初秋」101.6cm(88.0cm)、8.4mm(7.6mm)、「おりがみ」123.4cm(98.8cm)、5.6mm(5.4mm)で、アブラムシ微発生、アザミウマ類少発生であった。

10月咲き施設栽培の小ギクは、「ようせい」が39.0cm(45.8cm)、「白馬」33.0cm(36.6cm)、「おりづる」が44.6cm(57.6cm)となっている。電照抑制の11月咲作型では、草丈が10cm以上抑制されており、高温とかん水不良の可能性はある。

2 ユリ

奥越のシンテツポウユリは、4月に定植した「オーガスタ」が大阪、金沢、福井へ出荷された。本年度は実生苗の出荷がやや遅いことに加えて、葉枯病が花蕾、葉にみられた。7月中旬の降雨が影響していると考えられる。草丈92cm、葉数86枚、蕾数6.2輪で、出荷は8月27日頃までとなり、価格は金沢で80～130円であった。

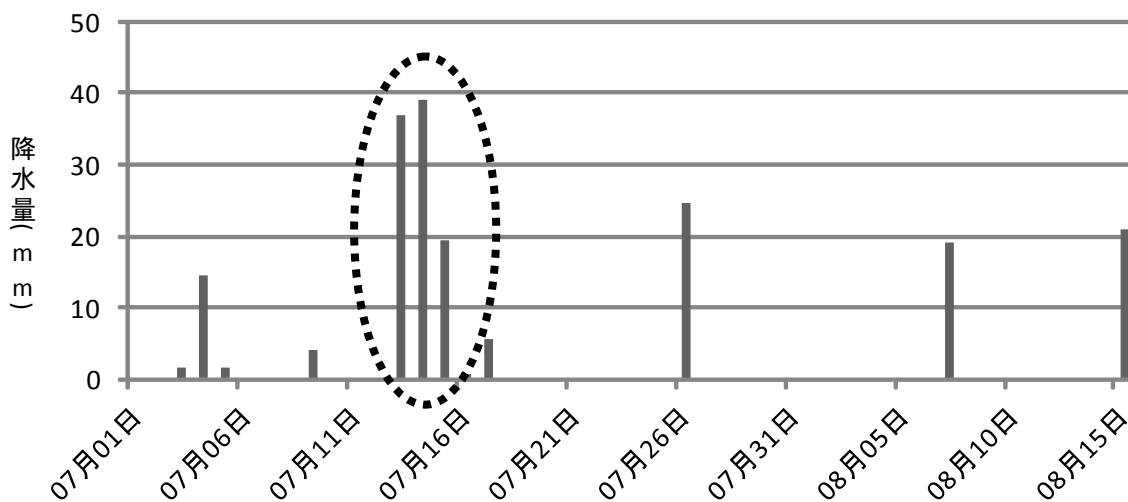


図2 大野市の7～8月の降水量(mm)

坂井のLAユリは球根が8月下旬に入荷予定で、JAの施設により馴らしと芽伸ばしを行う予定である。「オーガスタ」は圃場の排水が悪い部分で生育が悪く、生育のばらつきがみられた。1～2輪花が多く、葉枯病が少発生であった。「リリブライトレッド」は定植準備中である。

3 スイセン

促成スイセンは、7月下旬から8月上旬に定植された。早い圃場では発根が始まった（8月20日調査）。また、露地圃場のスイセンは圃場によりバラツキはあるが発根が始まり、平年並みである。

4 ストック

坂井地区のあわら市ではアイアンシリーズが主要な品種であり、直播が8月8日から開始された。品種は「チェリーアイアン」「マリンアイアン」「アプリコットアイアン」「ホワイトアイアン」等であり、8月18日現在で本葉2~3枚程度である。一部で高温による発芽不良が見られた。

越前市ではカルテットシリーズが8月22日(昨年16日)に直播された。

5 トルコギキョウ

奥越では2月に播種され、4月下旬に定植された「ロジーナグリーン」「ロジーナブルー」「ロジーナスノー」「ロジーナⅢ型ピンク」が8月上旬に出荷され、価格は60円前後であった。草丈67cm、12対葉で、一部にアザミウマ類少発生であった。

あわら市の抑制作型の定植は7月下旬~8月5日に行われた。品種はロベラシリーズ、レイナシリーズ、ネイルシリーズが主で、7月下旬定植は4対葉、10月上旬出荷予定である。一部に立枯病少発生である。5月下旬定植の「バルカンマリン」が開花盛期で草丈90cm前後で品質良い。



写真1 トルコギキョウ株腐病
高温多湿下で発生。多犯性であるため、翌年の持越しに注意必要。

越前市の8月16日調査の(昨年5日調査)トルコギキョウでは、4月下旬定植の「オーブカクテル」が7月下旬に収穫された。冷蔵苗の7月定植作型では、草丈21~30cm、8~10対葉で、一部出蕾している。

敦賀の「ブルーシルエット」「ピンクシルエット」は7月下旬に収穫が終了した。

若狭では5月中下旬に定植された「つくしの波」「つくしの羽衣」「エクローサホワイト」等が草丈60~70cmで、8月上中旬に直売を中心に販売された。

6 その他

福井東部の切り花用ハボタンは7月下旬定植(昨年23日、27日定植)で、「初紅」「晴姿」が8月17日調査で(昨年6日調査)、草丈25cm、20cm前後であり、葉数は23枚、20枚前後であった(昨年5~8枚)。病虫害はアオムシ類の食害がみられる。

アスターはあわらのステラシリーズ、あずみ系が出荷されており、さび病が多発している。

彼岸出荷用の電照抑制栽培は 15～20cm、大野市の松本早生は草丈 75cm、葉数 34 枚であった。開花はほぼ終了し、オオタバコガが多発生し、一部に灰色かび病発生している。

あわらのオータムヴィオレは草丈 60～70cm、蕾径は 8mm 前後である。デルフィニュームは新芽が伸びているが、勢いがいい。

対 策

1 秋植え夏ギクの定植準備と定植

(1) 苗づくりの管理日程

時 期	8/17	9/10	9/15	9/25	10月上
・かき挿し苗	台刈		かき挿し	_____	苗とり・定植
・土寄せ苗	台刈	_____	土寄せ	_____	仮 植 _____ 定植

特に本年は、高温で株が弱っているため、雨をめぐけて台刈りを行うか、雨後草勢が回復してから行う。草丈が低くスタントウィロイドに罹っている可能性がある株や黒さび病が罹病している株は用いない。

(2) 苗床の病害虫防除の徹底

白さび病とアザミウマ類を中心に防除を徹底する。病気に弱い品種は特に罹病しないように注意する。本年は、黒さび病、トマト黄化えそ病の発生が多いので、株から病気をもちこさないよう注意し、ウイルスを媒介するアザミウマ類の防除を励行する。併せて周辺環境の除草を励行し、飛び込みを防止する。

病害：有機硫黄系剤（ステンレス剤、ジマンダイセンフロアブル、エムダイファー水和剤）を週 1 回、予防剤散布する。

害虫：ミカンキイロアザミウマやミナミキイロアザミウマには、オンコル粒剤 5 やプリンスフロアブルを散布する。カブラヤガが産卵を行うときがあるので、適切な対策を行う。ただし、プリンスフロアブルは大型の幼虫（オオタバコガ等）には効果が少ない場合があるので、注意する。

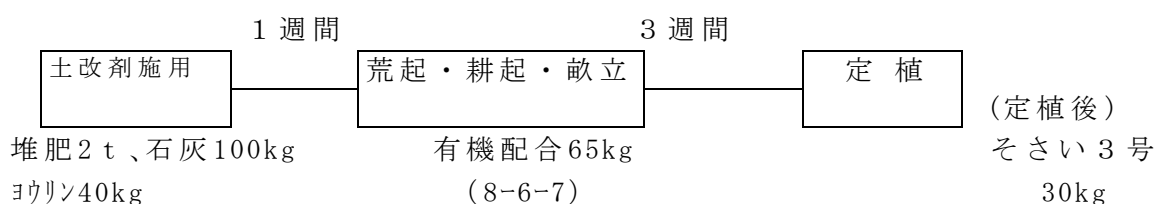
(3) かき挿し苗の場合、台刈 2～3 週間後の 9 月上中旬に、わき芽の長さが 10cm 程度になったかき挿し苗を、親株の付け根より掻き取って用いる。穂は、天幅 1 m 程度、高さ 15cm 程度の畝をつくり、5×10cm 程度の間隔で挿す。挿し芽後は十分に灌水する。1 週間程度は、株の消耗を抑えるために寒冷紗などで 30% 程度遮光する。

(4) かき挿し苗の挿し芽して発根後に、有機配合肥料（窒素 6% 程度）を 1 m² 当り 100 g を条間に施用するとともに、液肥 1000 倍を 1 週間に 1 回、2 度程度施す。

(5) 土寄せ苗の場合、9 月上中旬頃に土寄せする。充実した苗をとるために、畝 10 m 当り有機配合（窒素成分 6 % 程度）1 kg とそさい 5 号 200 g 程度を施す。

(6) 定植時期は春の芽立ちを良くするため、奥越地方で 9 月下旬～10 月上旬、福井平坦部で 10 月上旬、若狭地方で 10 月中旬までに植え付けるよう定植準備を進める。輪作の間隔が短いとギクの生育が極端に低下するため、最低でも 3 年間は間隔をあけることが望ましい。

(7) 標準的作業過程と施肥量（10 a 当り資材量）



- (8) 排水が悪いと越冬性が低下するので、排水の良い圃場を選定する。額縁排水等排水路の整備を行う。
- (9) 標準的な畝幅は1.3mとするが、排水の悪い圃場や耕土の浅い所では狭めにとる。畝の高さを20cm以上確保する。畦成形後、速やかにかん水し、除草剤の前処理剤を散布しておけば、翌年まで抑草効果がある。
- (10) 栽植密度は35cm条間の2条植えとし、株間は10cmを標準に芽立ちの悪い品種はこれより狭くし、芽立ちの良い品種は広くする。また、6月咲きや芽立ちの悪い品種は早めに定植する。

2 秋ギクの肥培管理と防除

肥効が落ち、葉色が淡くなり、葉の生育が悪くなっている場合は、マルチの条間部分を破り、雨水を入れることで、土壤中肥料の肥効を高める。また、1000倍に希釈した液肥を葉面散布するか、開花30日前後に速効性の化成肥料を少量施用する。ただし、白さび病、黒さび病の兆候がみられる場合は控える。また、8月中下旬からオオタバコガの密度が増加するため、ローテーション防除を行い、被害の抑制を図る。

3 キクの主要病害虫防除

(1) キクの白さび病

9月に入り気温が低下し、雨が多くなると、白さび病発生の好適条件となるので防除を徹底する。下葉に病斑がある場合は病葉を除去し、チルト乳剤25、アンピルフロアブル等の治療剤を葉裏にもかかるように散布する。ただし、感受性が低下した薬剤は、散布しない。

(2) アブラムシ類は圃場の周辺（畝のはし）から侵入するので、初期の防除に努める。薬剤抵抗性の発生を避けるため、系統の異なる薬剤（例：オリオン水和剤40（カーバメート系）、アーデント水和剤（ピレスロイド系）、モスピラン水溶剤（ネオニコチノイド系）、ウララ50DF（新規；フロニカミド等）を交互に散布する。数回に1回はエコピタ液剤等の気門閉塞で殺虫する剤を取り入れ、抵抗性害虫の増殖を抑制するとよい。

(3) アザミウマ類も多くなるので、膜切れ4～5日前より薬剤散布を励行する。

4 キククロロティックモットルウイロイドについて

(1) 病気の特徴として、キク下葉に退色・緑黄斑症状が現れる。品種や他のウイルス、ウイロイドとの重複感染により症状が異なる。

(2) 伝染方法は、接触（汁液）伝染のみであるため、下葉かき、摘蕾などの管理作業は、感染が疑われる株を後回しとし、手袋を変えたり、はさみ等使用器具を火等で消毒したりしながら作業を進める。

(3) 台風やネット上げ時の葉擦れによっても感染拡大するため、疑わしい品種は基本的に導入しない。

(4) 感染株は圃場から除去し、他株に感染が拡大しないようにする。

5 スイセンの管理

(1) 季咲スイセンでは、9月上中旬に雨量が少ないと開花期が遅れる傾向があるので、前年に葉先枯病の発生が少なく、用水が確保できる圃場では灌水する。夕方から夜間に灌水し、昼間は溝に停滞水がないようにする。

- (2) 促成栽培の遮光資材の取り外しは、気温25℃以下になった時点(9月15日頃)を目安とし、曇天の時に行う。
- (3) 促成栽培では9月下旬以降の灌水をやめ、根腐れ防止のため、溝さらえ等圃場排水を徹底する。
- (4) 球根養成圃場では、P K化成をa当たり5kg、マグフミン等の石灰資材を10kg施す。
- (5) イノシシの獣害が多くみられる地域では、電気柵等で対策する。
- (6) 台風対策をしっかりと行い、ハウス栽培では補強を行う。雪害にも備えるよう、支柱などを準備し、十分に補強しておく。

6 ストックの管理

- (1) コナガは育苗中から開花期にかけて常時発生し、葉裏から食害される。苗や生育初期に心葉が食害されると被害が大きく、生育が遅れ枯死することもある。抵抗性の発達しやすい虫であるので、薬剤散布後は効果を確認し、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。トアロー水和剤CT、コテツフロアブル、ノーモルト乳剤等が有効である。コナガコン等の交信攪乱剤を用いる場合はできるだけ広域に設置する。
- (2) 気温が高い時期の育苗では、立枯れ性病害の予防対策としてオーソサイド水和剤80を散布する。立枯れ性病害が発生した場合は、被害株を抜き取り、病原菌を判別する。簡易な判別法では、苗立枯病(リゾクトニア菌)の発病株を引っ張ると、地際からちぎれるが、苗腐病(ピシウム菌)の場合は、地際部がこより状にくびれ、引っ張るとちぎれないで、根がついてくる傾向がある。生育がやや進むと、苗立枯病では地際部分から褐変し、表皮が脱落して、茎の髓部のみとなるが、苗腐病は根が褐変し、生育不良や萎凋する。
- (3) 本圃の定植前に立枯れ性病害の予防対策としてガスタード微粒剤20~30kg/10aで土壌消毒する。
- (4) 定植後の遮光の期間が長くなると、徒長するばかりでなく花芽分化が遅れ、開花が遅延する。したがって、遮光資材は活着後にできるだけ早く除去する。
- (5) 定植後1か月間は、1週間に1回の間隔で、液肥を積極的に施用し、活着と初期生育を促す。
- (6) ストックの中生や晩生品種では、ビビフルフロアブルの1000倍を、葉数10~14枚時と、その7~10日後に2回茎葉散布することで、開花が促進される。10a当たり1000を目安に散布する。
- (7) 9月下旬~10月上旬の花芽分化前後に高温に遭遇すると、花とびや心止まりが発生するため、10月中旬まで気温17℃を目安にサイドビニールを開放する。
- (8) 10月下旬から保温を開始するが、日中は必ず換気して温度較差を少なくする。
- (9) 発蕾までは草丈を確保するため、灌水を充分に行う。発蕾以降は徐々に灌水回数を減らし、開花期が近づいたらさらにひかえて切り花の品質向上を図る。

7 ハボタンの管理

- (1) 栽培中から開花期にかけてヨトウムシ、アオムシ類等が発生し、食害される。苗や生育初期に成長点の芽が食害されると被害が大きく、生育が遅れ枯死することもある。抵抗性の発達しやすい虫であるので、薬剤散布後は効果を確認し、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。フェニックス顆粒水和剤、プレオフロアブル、ノーモルト乳剤等が有効である。

(2) 葉かき作業を順次行う。下葉かきを生育期間内に3~4回行い風通しを良くするとともに草丈を伸ばす。初期はある程度込ませたほうが草丈が伸びるため、1度にするのではなく、順次ゆっくりしたほうが草丈は伸びる。

(3) 水管理

露地栽培では干ばつが続いたときやハウス栽培で土壌水分が十分でない場合は、灌水を行い、適切な水管理を行う。逆に、秋の長雨で圃場に停滞水がある場合は排水対策を行う。